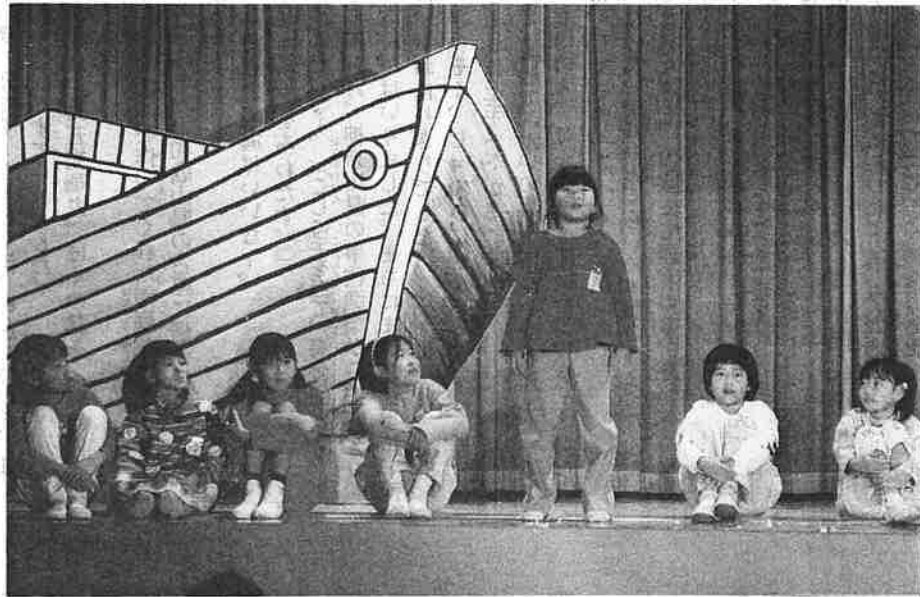


福竜丸だより



都立・第五福竜丸展示館ニュース

発行
(財)第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



「わすれないで—第五福竜丸ものがたり」を発表する辰巳小学校三年生

- わすれないで
—第五福竜丸物語— 台本
- 配役
- *ナレーター 片江 中島 遠藤 上倉 山村 佐藤裕 今野
 - *船をつくる人 金沢 須谷 室町 小野塚 梨田 大漁ばた 島津
 - *大漁をよるこぶ人 浅川 富田 後藤 青柳 宮崎 近藤
 - *ソーランぶしをおどる人 土井 福地 渡部 赤澤 渡辺
 - *おうえんでおどる人 坂路 原村 松森 中村 永野 横山 宮本 金沢
 - (船の乗組員) 伊藤 永峰 須谷
 - *死の灰をあひる人 西村
 - *放射能検査をする人 伊藤 永峰 須谷
 - (築地市場) 小松 朝倉 野崎 安保 全 松下
 - *まくろをうめる人 佐藤(希) 直 赤沢 田野 井上 菅原 高橋
 - *辰巳小学校の先生
 - *館長さん

東京都江東区。辰巳小学校は文字どおりみやこの東南、東京湾の埋立地の「海」に近い学校だ。夢の島は目と鼻の先、橋つたいにある。十一月はじめ同校の三年生全員が先生と共に歩いて展示館を見学、絵本「わすれないで」で学んだ船を実際に見、話を聞いて、「もうすぐ学芸会で発表するんだ」と目を輝かせた。十一月十八日、全校の学芸会が開かれ、一年生から六年生まで、それぞれの学年がひとつづつ劇を上演、三年生は「わすれないで—第五福竜丸ものがたり」を発表した。一人ひとり生き生きと躍動していた。



新しく展示された「第五福竜丸保存運動」のパネル

21世紀、みなさんの手で船を守り いっそうに力強い航海を—展示館展示替

第五福竜丸展示館は来る21世紀、開館二十五周年をむかえます。十一月末、展示館では二〇〇〇年度第二回の展示替がおこなわれましたが、21世紀への期待をこめ、保存運動の歩みをふりかえり、運動と共に成長してきた展示館の活動と歴史を考え、運動の継続を若い人々に訴える展示物を作成、新しく展示しました。

①第五福竜丸の軌跡、原水爆のない未来への航海—保存運動の歩み②船を消そうとしたものと守った人びと③沈めてよいか第五福竜丸、の三つで構成された展示パネルは展示館入り口の正面から南側の壁面いっぱいに表示されました。中でも保存運動の誕生に歴史的な役割を果たした武藤宏一氏の投書「沈めてよいか第五福竜丸」は、天地一頁余左右三折の水色の厚板に一文字五折四方の特大明朝体で一文字づつ心をこめて手書きで書かれ、夢の島に傾く船の写真と共に展示されました。これは展示館の心を語り存在の理念を示しています。小さな声でつぶやいてください。声にだして読んであげて

ください」の訴えがその横にそっと添えられました。「第五福竜丸の軌跡」は年表構成で、一九四七年の進水から二〇〇〇年春のエンジン戻るにいたる航跡が八〇項目余、年月を追って示され、多難で多彩な運動の歴史をいきいきと刻みました。

写真、新聞、展示会のチラシ、パンフレット、解説などをこまかく散りばめて構成された「船を消そうとしたもの」と「」のパネルは、守った人びとの姿を示しつつ「第五福竜丸の波乱の半生—それは船を消さそうとしたもの」と船を守ろうとした人々の葛藤を鮮烈に示しています」のことははじまり、次ぎのように結ばれました。

「第五福竜丸に会いにきてくださったみなさん。このりんとして立つ大きな船にしみこんでいる船を守ってきた人々の願いと運動を心にとめてください。これから、みなさんの手で船を守り育て、いっそう力強い航海をさせてください。ラッセル・アインシュタイン宣言の高貴な精神は、いまでも生命力に満ちていると確信しています」

ナレーター 東京湾のかたすみに、みわたすかぎりの、ゴミの山がありました。東京のゴミのうめ立て地、ゴミの島とよばれていた、今の夢の島です。1967年、今から33年前。ぼくはそのごみの中に、すてられました。

(片江) ぼくの名前は、第五福竜丸。ぼくの話、聞いてください。

1946年。ぼくを作ってくれた南藤藤夫さんが、南の戦地から、ふるさと和歌山県の古座に帰ってきました。

南藤さん (下手より)

(須谷) やっぱふるさとと海はいいな。
(きやくせきの海をみわたす。)

大きな船を作りたいな。(こしに手を添えて、海を見ている。)

ナレーター 1946年10月、神奈川県、神奈川県の事代漁業から、木ぞう船(佐藤裕)のちゅうもんがはいりました。まことにまった仕事に、南藤さんは、おおはりきりでした。

(須谷) よーし。さっそく、じゅんびにかかろう。
(うれしそうに上手へ下がる)

(梨田) これは、まつの木、ほかにも、すぎやひのき、大切なところには、けやきをつかうんだ。
(小野塚) 全部で、だいたい100本くらいの本がひつようなんだ。
(金沢) 三重県でとれた木を、古座まで運ぶのは、たいへんなもんだな!

(室町) おれたちだけでは、木を運ぶのはとてもむりなんで、牛に引いてもらおう。
(四人は上手へ下がる)

船のへ先を出す。(木上さんは道具を上手より持っていく。)

(須谷) 春のりょうまでに、まにあわせよう。みんながんばろーや。みんな おー！(木を切ったり、くぎをうったり、ペンキをぬったりする)

(梨田) やったー！ついにかんせいだー！ *船のどう体まで出す(室町) ついにできましたねー！

(小野塚) まにあって、よかったなー！

(金沢) 南藤さんも、これでいよいよ結婚ですねー。いやーめでたい、めでたい。

ナレーター 1947年3月20日。ぼくは、ちゅうもんからわずか6か月で、かんせいした。ぼくには、第七事代丸という名前がついた。

ぼくは、はじめて海にでた。和歌山県、古座をはなれて、神奈川県、三崎町の事代漁業へとむかった。ぼくのすがたが、みえなくなるまでみんなが、見送ってくれた。(大工さん達が、手をふりながら上手へ下がる)

ぼくは、カツオの一本つりで、日本一の大漁をはした。1947年から4年間、まい年1位をとりつづけ、たちまち有名になった。

(山村) しかし、1953年。ぼくは神奈川県をはなれ、静岡県のやいづにうつることになった。ここで、マグロ漁船にかいぞうされ、名刺も第五福竜丸に変わった。

マグロはカツオとちがって、遠く南の海にでかけて、漁をする。ぼくはわくわくした。2メートル近くもある、大きなマグロをたくさんつり上げ毎日、とても楽しかった。町に帰ると、みんなもとてもよろこんでくれた。(上手より)

(福地) あ、船だー。みんな、船が帰ってきたよー。(みんなをよぶ)

(島津) たいりょうだ、たいりょうだー。(ぶたいをうれしそうに、かけまわる。)

*ソーランぶしのBGMとともに、おどるひとびとは、うれしそうにとうじょうして、1、2番をおどる。

(青柳) 今度のりょうも、たいりょうだー。マグロもこんなにでっかいぞー。

(浅川) 父ちゃんも、元気に帰ってきた。

(富田) うちの兄ちゃんも、元気でよかった。

(宮崎) これで、うちの母ちゃんも、ひとあしんだ。

(後藤) こんやは、ひさしぶりに、父ちゃんとふるはれるぞー。

(土井) こんやは、ごちそう。楽しみだなー。

(近藤) うちもそうだよ。みんな、はやくうちにかえろー！

(みんな) そうしよう。そうしよう。(と上手に下がる)

*暗転 ナレーターにスポット (船を下げる)

ナレーター 1954年1月22日、ぼくは、23人の乗組員を乗せて、またマグロをとりに、太平洋を南へとむかった。

乗組員は、18才から39才まで。へいきんねんれいは、25才という、はたらきざかりだった。

2月19日、ぼくは、アメリカのマーシャルしょとの、ビキニ環礁についた。

3月1日、ここで 12回目のはえなわをはる。

*舞台照明 少し明るくする

(乗組員、はえなわを持って上手よりとうじょう)

(坂路) よーし、ここに、はえなわを、しかけるぞー。

(みんな) おー

(原) おれたちのしごとは、夜も屋もねえなー。

(森) マグロのむれしだいだからなー。

(中村) こんども、手ごたえがありそうぞ。

(原) うんとこさとして、はやくうちに帰ってーなー！

*スポット赤でしぼる(水爆実験の雲) *爆発の効果音

(横山) なんだ、あれは。(ゆびをさして見る)

(村松) 太陽があがったぞー。

(中村) いや、あれは太陽なんかじゃない。

(坂路) そうだよ。西から太陽がのぼるかっ！

(横山) とにかく、たいへんな事がおきたに、ちがいない。

(横山) おおいそぎで、マグロをひきあげて、はやく帰ろー！

(みんな) おー

(みんな) (みんな、はえなわを引き上げる。その時、白い灰がふる。)

(中村) なんだ、この白い灰は？(灰を手のひらにとってみる)

(永野) 目や、耳の中にも入ったぞ。(目や耳をさわる)

(村松) これが何なのか、とっておいて、あとで調べよう。(ビンに灰を入れる)

ナレーター マグロを引き上げる乗組員たちのかたに、体に、そして、ぼくの中からの中にも、白い灰が、ふりはじめた。いったい何がおこったのだろう。

(朝倉) はえなわをあげるのに時間がかかり、白い灰がふる場所から抜け出すのに、5時間近くかかった。その間、ぼくたちは、白い灰をあび続けた。

*暗転 (りょうしたち下手へさがる) *船、マグロを出す。

(佐藤希) この白い灰は、アメリカがビキニ島で行った、水爆実験によるものでした。なんと、広島原子爆弾の1000倍もの、はかい力を持つ水爆で、サンゴしょうをふきとばしました。

(直) この白い灰には、たくさんの放射能がふくまれていたので、『死の灰』とよばれました。

(赤澤) 第五福竜丸は、全速力で焼津をめざし、3月14日、朝早くとうとう焼津港に着いた。

(渡部) 帰ると中の船の中で、気持ちが悪くなったり、頭がいなくなったり、ひふの色が変わったり、かみの毛がぬけたりする人が多かった。

(今野) 港に着くと、乗組員全員が、病院でけんさをした。じゅうしようだったふたりは、すぐ東京の病院へ入院した。けんさのけっか、全身が、放射能に汚染されていた。特に、かみの毛の汚染がひどかった。かみの毛、つめは切られ、はかんされた。



「わすれないで—第五福竜丸物語」より

(西村) 何か、いつもありませんか？
 (野崎) どうやって、ゴミの中から、船を運んできたのですか？
 (高橋) コロの上にレールおいて、トラクターでひっぱりました。船がこわれないように、一日一メートルくらいずつ、ゆっくりひっぱりました。
 (朝倉) 死の灰をあびたひとは、どうなったんですか？
 (高橋) 23人中11人がなくなりました。生きておられる方も、いろいろな病気で今も苦しんでいます。
 (菅原) 船に、さわってもへいさですか？
 (高橋) はい、だいじょうぶです。もう、放射能は、ありません。外にも、今年ひきあげられたエンジンや、マグロ塚などもありますので、よく見ていってください。
 (西村) 今日は、ありがとうございます。(こどもは立つ)
 (みんな) ありがとうございます。(館長さん、上手へ)
 (小松) うちのお母さんが子どものころ、ただの「ロボブネ」だったんだって。
 (井上) へー。でも今は、しゅりりして、ここにほぞんされて、

1. このちきゅうは このいのちは
 いくおくねんの ときをこえて
 きみもぼくも かけがえのない
 たいせつな にんげんどうし
 ひとりひとりの かがやきが
 ひとのれきしをつくってゆくー
 かがやけ きみのこころ
 せいりっぱい いきてゆこう
 かがやけ きみのいのち
 せいりっぱい いきてゆこう
 せいりっぱい いきてゆこう
 2. このちきゅうを このいのちを
 うばうものを ゆるしはしない
 きみとぼくと てをとりあい
 あつにおもいで いきてゆこう
 ひとりひとりの かがやきが
 ひとのれきしをつくってゆくー
 かがやけ きみのこころ
 せいりっぱい いきてゆこう
 かがやけ きみのいのち
 せいりっぱい いきてゆこう
 かがやけ きみのいのち
 せいりっぱい いきてゆこう

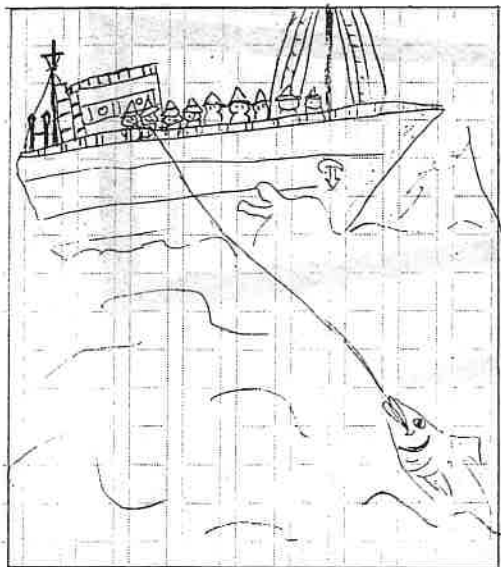
輝け君の命

*ピアノでBGM(輝け君の命)
 *スタンドマイクを上手すそに出す。
 *作文を読む(三人) 略
 *読んでいる間、歌うたいけいにならぶ
 *三人が作文を読み終わったら全員で歌う。『輝け 君の命』

(安保) よかったね。この船は今、どんな気持ちかな？
 (全) ここに来る、たくさんの人に会えるから、きつとさみしくないよ。
 (田野) こんど、うちのひとといっしょに、またきたいな。
 (西村) それはいいですねー。
 ナレーター ぼくの名前は、第五福竜丸。ぼくはいつも、夢の島(島津)で、みんなが来るのを、待っています。ぼくを、いつまでも、わすれないで。

ぼくの体から、マグロが陸に上げられた。ぼくもマグロもけんさされた。
 *舞台照明 明るく (科学者上手よりとうじょう)
 (宮本) これが、放射能をはかるきかい、ガイガーカウンターです。放射能をかんじると、おとがでます。
 (金沢) それでは、やってみましょう。
 (二人で) *船やマグロをガイガーカウンターで調べる。*ガイガーの効果音
 (宮本) 船もマグロも、かなりつよい放射能がありますねー。
 (金沢) これは、たいへんなことに、なりましたねー。
 (こまった顔をして下手へ)
 ナレーター 新聞記者の人や、テレビきよくの人たちが、ぼくのこ
 とを記事にした。
 (佐藤裕) 町中だけでなく、日本中がおおさわぎになった。
 (中島) ここは、築地市場
 (築地市場の人、一輪車やスコップをもって、上手より) せっかくとれたマグロも、放射能に汚染されてしまった。
 (伊藤) げんぱくマグロは、どこにもうれない。
 (永峰) しかたがない。うめるしかないな。
 (須谷) (三人で顔を合わせ、うなづく)
 (伊藤) (あなをほって、マグロをうめる。舞台のはじから、下におとす) あー、かわいそうに。マグロがないているよー。
 (道具を持って、下手へ)
 ナレーター だんだんぼくを見る、みんなの目が、つめたくなつた。なぜ？ぼくがなにをしたというの？ 死の灰は、ぼくのせいじゃない。
 (上倉) 8月31日、久保山愛吉さんが、重体となり、死の灰から20日目、9月23日に、ついに息をひきとった。
 (山村) 10月、ぼくは、東京水産大学の船となった。放射能が、消えるのをまって、2年後の1996年、あちこちをとりかえられた。

(遠藤) ぼくは、水産大学の練習船『はやぶさ丸』に、生まれかわった。ぼくははやぶさ丸として、10年いじょう、はたらいた。
 (片江) そして、1967年、おんぼろになったぼくは、エンジンはずされて夢の島へすてられた。
 (佐藤裕) ぼくが生まれて、20年目。ぼくは、夢の島のゴミの中で、ひとりぼっちだった。雨がふれば、体の中に水が入り、しだいに、ゴミの中にしずんでいく。ところが、ぼくのことをおぼえてくれていた人たちがいました。
 (中島) 地元(佐藤裕)の江東区(中島)のひとたちだけでなく、平和をねがう、たくさんの人たちの協力で、ぼくをほぞんしようという声(中島)が、全国に広がりました。
 (高橋) 1976年6月10日、ついに第五福竜丸てんじ館が開館しました。ぼくは、えいきゅうに、ほぞんされることになりました。その後、たくさんの方が、ぼくを見に来るようになりました。
 (佐藤裕) きょうは、辰巳小学校の3年生が、やってきました。
 (松本) (先生と子どもたち 上手よりとうじょう) わー、ほんものだー。大きいねー。
 (安保) ほんものはすごいねー。
 (全) 本で見たのと、おんなじだよー。
 (先生) わー、てんじょうが、高いね。
 (西村) 先生(安保) あつまってください。それでは、館長さん(高橋) に、この船について、お話ししていただきましょう。(こどもは体育すわり)
 (高橋) 館長さん(安保) みなさんこんにちは。
 (高橋) (みんな) こんにちは。
 (高橋) きょうは、よく来てくれました。この船をよく見て、ふれてみて、この船が何を言いたいのか、かんじとってください。



ていると思う。アメリカがあんな事をしなければ、こんななみだがつかわれる事はなかった。

しかも、君だって放しやのうをあげて、放しやのうがきえるまでまたされた。その後、大学の練習用の船になったが、ふるくなつて「ゆめの島」にすてられた。

それがある日、新聞記者が君の事を新聞にのせた。それを見た人たちは、君のために洗ったり、しゅうりしてくれたりしている。しゅうりが終わると君は、たび

今、君は、ゆめの島公園にい

ねそれだけおそろしい事があったというのに、たくさんの人が苦しむ、マグロはうめられたというのに、アメリカは、それから12月の間に6回も核実験をおこなっていました。だれが、原水爆と言うおそろしいへいきを作りだしたので

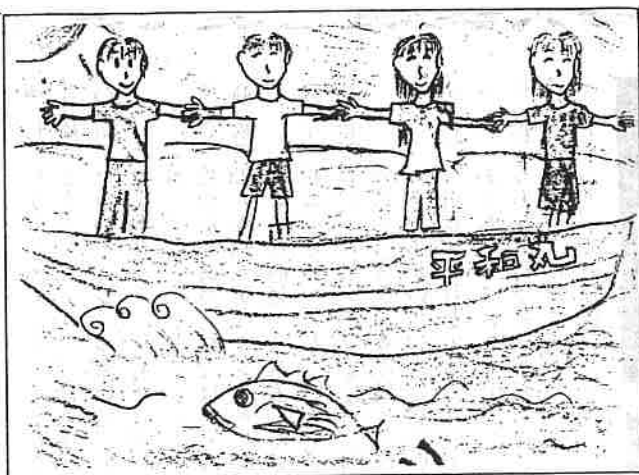
しょうか。原水爆さえなければ、「死の灰」はふらずに、だれも死ぬ事はなかったし、マグロもうめられずにすんだでしょう。そして爆だんがあっても、使わなければいいのに、どうして爆だんを使うのでしょうか。おそろしい事けんがあっても、なぜ実験をやめないのでしょうか。私は、色んな人たちに語って行って、原水爆がどれだけおそろしいか、わかってもらい、いつか核実験のない世の中になるのをねがっています。

「原水爆の被害者は、私を最後にしてほしい。」

久保山愛吉さんの言葉のとおり、もうだれにも被害がないように、ほんの少しであるけれど、いろんな人に語って、身近な所から、爆だんのない平和な世界になるようにして行きたいです。



第五福竜丸



船を見つめたー羽沢小学校四年生の作文と絵から

十一月二十一日、東京都三鷹市の羽沢小学校四年生五十九名は、千羽鶴の入ったダンボールを大切にかかえて、「夢の島の大きな船」に会いにきた。「第五福竜丸に思う」と書いた見学前の学習の作文集を渡し、館長さんのお話を聞いたあと、思い思いの場所に散らばって原稿用紙やノートに絵をかいた。船にもさわって本物だと歓声をあげた。後日送られてきた「わたしたちは福竜丸をわすれません」と題した感想文集は、そのときのスケッチとともに、警さんと「君もがんばって」の声であふれていた。

第五福竜丸 浅野 翔

ぼくは、なんで水ばかりじっけんをするのだらうと思います。第五福竜丸はあの水ばかりじっけんがな

ければ被ばくしたのりくみ員や、第五福竜丸はおじに日本にかえってきたのに、水ばかりじっけんにまきこまれて本当にかわいそうと思いました。「わすれないで」の本を読んだらむねがかなしくなりました。白い灰はふりつづいたと書いてあったのすごいゆきのようにつたんだなあと思いました。はき気やずつうをうったえたと書いてあったからかなりつらかったんだなあと心から思いました。なん日かたってからかみの毛や頭や首にできものができたというところを読んだらむねがいたくなりしました。そのことをわすれないために平和を守る人たちの第五福竜丸をのこしたいというねがいがかかって本

によかったなあと思えました。これからも第五福竜丸でんじかんをぼくたちががんばってのこしたいです。

第五福竜丸へ 白井 ゆみ

君は一九五四年、一月二十二日、いつもと同じようにマグロをとりにいった。だが、そのと中、アメリカの原水爆がふりだした。その原水爆のひ害にあった。第五福竜丸のせん長の久保山愛吉さんが亡くなった。それから八人も人が亡くなっていた。

先生からもらったしりょうで、久保山愛吉さんの家族が泣いているのを見た。他の八人の家族の人も泣い

第五福竜丸へ

羽沢小四年二組 橋田 夏美

わたしは先生の話を聞いて「ひどいな」「かわいそうだな」と思いました。アメリカ軍が水爆実験をしてなんで日本がませいにならなくてはならないのか、思いました。福竜丸がゆめの島にすてられてしまったのにそれをほんたいて福竜丸をゆめの島から取り出す活動をしてくれた人は心のやさしい人、だと思えます。ゆめの島は名前はいい名刺刺だけど本当はゴミだらけでくさいのによく第五福竜丸をゆめの島から取り出せたと思います。だから今はこうやって展示館に展示されていて今はこの事を勉強をしています。もしも第五福竜丸をゆめの島から取り出していなか、たら、今ごろ第五福竜丸はボロボロになっていと思います。だからわたしはその人たちの事をとてまかんしゃしています。